

# アメリカ詩の研究

長 畑 明 利

本稿を執筆しているのは2014年の秋だが、ここに至る半年ほどの間に、大学に関わる法改正や、数々の改革案の提示があり、関係者に種々の反応をもたらしている。今後の少子化をにらんで語られるダウンサイジングの議論の中では、人文・社会系分野の研究・教育不要論も聞かれ、それらに代わる大学の使命として示されるのは、学生の職業訓練であり、グローバル人材育成である。教養教育が軽視され、役に立つ学問の重要性が過度に強調される風潮の中で、「アメリカ詩の研究」の場を確保することも、今後さらに困難になるかもしれない。アメリカ詩に限らず、外国文学研究もしくは詩の研究は、不要論のただ中にある人文系の学問の象徴的存在としてとらえられ、実用的な職業訓練の対極とみなされがちである。しかし、こうした状況の中でも、「アメリカ詩の研究」は堅実な形で営まれており、そのことは、研究書や論集だけでなく、英米文学関連の学会、その支部、個別の詩人を扱う学会等の出版物を概観することによっても確認できる。とりわけ、若手研究者や研究者を志望する大学院生たちが、研究成果を発表していることは喜ばしいことである。

さて、当該期(2013年4月～2014年3月)に出版されたアメリカ詩に関する単行本としては、道永周三『ハーマン・メルヴィルの詩——メルヴィルの詩に関する入門書』(大阪教育図書、2013年6月)がある。本書は、副題に「入門書」とあるが、メルヴィルの詩作品1篇1篇に解説を加えた労作である。取りあげられているのは、『戦争詩集』、『クラレル——聖地における詩と巡礼』、『ジョン・マーと他の水夫たち』、『ティモレオン』の4詩集に加え、1924年のメルヴィル全集に収録された詩群(「雑詩」)、同じく1924年の全集に収録された「ボンバの時代のナポリ」、「宿屋にて」と「雑草と野生の花」、1947年にHoward P. Vincentが編んだ*Collected Poems of Herman Melville*に収録された「未刊行の詩」である。本書は大冊『クラレル』を含む、メルヴィルの詩を丹念に読む作業から生まれた本である。先行研究に見出される指摘を適宜紹介しつつ進められる詩の読解は、原著テキストを実際に読むことを前提として為されており、読者にもまたそれらの作品を実際に手にとって読んでみることを促しているように思われる。

当該期に出版されたアメリカ詩の翻訳書としては、ホイットマン、パウンド、スナイダーほかの例がある。まず、ウォルト・ホイットマン『草の葉 初版』(富山英俊訳、みすず書房、2013年5月)を取りあげる。『草の葉』の初版を訳した本書には、初版に収録された12篇の詩の訳に加え、冒頭に短い「解題」が、また、巻末には「訳者

解説」が付されている。日本におけるホイットマンの研究には長い歴史があり、翻訳も数多くのもので出版されているが、初版を訳したものはこれ以前にはなかったようである。訳文および訳注が原テキストの解釈であるとすれば、そこには訳者による原詩の解釈を見ることが出来る。「訳者解説」で述べられているように、『草の葉』の「最終版が初版中の重要作品をまるで違うものに変えた、ということはない」とはいえ、初版中の行や節の抹消・変更には、「後年の詩人がおもに性と宗教について一般読者の強い拒否反応を避けようとした」跡を見ることが出来る。訳注に示されたテキストの変更の指摘をたよりに、そうした「抹消・変更」以前の、初版の「性急な熱気」を確認することにも意味があるだろう。

パウンドの翻訳としては、小野正和・岩原康夫訳による『カンツォーネ』（書肆山田、2013年12月）が出た。本書は、同じ訳者による『消えた微光』、『仮面』、『大破』に続くパウンドの詩集の翻訳である。タイトルは『カンツォーネ』とあるが、*Canzoni of Ezra Pound* と *Ripostes of Ezra Pound* という2冊の詩集の翻訳である。訳詩に加え、巻末には「たゆたいながら、さりながら——ロマンティシズムとクラシシズムと」（小野正和）ならびに『突き返し』について——パウンドの工房（四）」（岩原康夫）と題された2篇の「訳者あとがき」が収められている。前者は、『カンツォーネ』所収の詩を解説しつつ、そこに見出される英詩や西洋詩の伝統との接点もしくは相互の関係について指摘する。後者は、『突き返し』出版のいきさつ、出版後の批評家らの反応、作品に見られるモダンの兆し（特に、散文性とアイロニー）など、原著に関する重要な情報を的確な形で提供するものである。「海をゆく人」、「ある女性の肖像」、「帰還」など、『突き返し』にはパウンドの初期の著名な作品が収録されているが、詩集に収録された他の詩に光が当たることはそれほど多くない。また、『突き返し』に先行する『カンツォーネ』は日本でそれほど読まれているとは思わず、研究も少ないようである。この訳詩集の刊行により、両者の再読がなされ、さらに研究が進むことを期待したい。

アメリカ詩人の作品の翻訳としては、ほかにゲーリー・スナイダー『For the Children——子どもたちのために』（高野建三写真、山里勝己訳、野草社/新泉社、2013年4月）、トレイシー・K・スミス『Life on Mars——火星の生命』（中村和恵訳、平凡社、2013年5月）も出た。『For the Children——子どもたちのために』は、シエラ山中にあるスナイダーの住居キットキットディジーとその周辺をスナイダーおよび関係者とともに撮影した写真集の体裁をとるが、写真とともに、スナイダーの詩、エッセイの抜粋の翻訳も掲載されている。（詩は原詩と翻訳を見開きページに収める2カ国語版となっている。）また、巻末には、訳者のものを含む4篇のエッセイを収録する「私とゲーリー・スナイダー」と題されたセクションがある。『Life on Mars——火星の生命』は、スミスの2012年度ピューリッツァー賞受賞作品の翻訳である。タイトルが示唆するように、本書は、宇宙や宇宙旅行をモチーフとするデイヴィッド・ボウイ

## アメリカ詩の研究

の歌への言及をちりばめつつ、生と死、家族や時事問題などを題材にした思索を展開する詩集である。近年、同時代の詩人の紹介が必ずしも活発とは言い難いことを思えば、こうした訳詩集の出版は歓迎すべきことであろう。（なお、ポピュラー音楽関連では、昨年死亡したルー・リードの訳詩集『ニューヨーク・ストーリー——ルー・リード詩集』[梅沢葉子訳、河出書房新社、1992年]も再刊された[2013年12月].）

当該期には、論集に収録されたアメリカ詩に関する論考は多くなかったが、阿部公彦「〈目の失敗〉の物語——ウォレス・ステイヴンズとハワード・ホジキン」が、論集『絵のなかの物語——文学者が絵を読むとは』（庄司宏子編著、法政大学出版局、2013年6月）に収録されていた。本論考の前半部は、「凝視」をキーワードとして、ステイヴンズの「瞑想としての世界」と「雪の男」の読解を試みるもので、後半部は、イギリスの画家ハワード・ホジキンの作品を取り上げ、「額縁」論を展開しつつ、「凝視」の行為を論じるものである。

学会誌掲載の論文に移る。*The Journal of the American Literature Society of Japan*, No. 12 (日本アメリカ文学会、2014年2月)には、Tepei KURUMA, “‘I, too, Was Liege to Rainbows’: Hart Crane’s ‘The Dance’ and Breaking the Mirror’s Pledge” が収録されている。この論文は、ハート・クレインの長編詩 *The Bridge* の第2部 “Powhatan’s Daughter” 中の一セクション “The Dance” を取りあげるもので、論者は、そこに示される白人の語り手と先住民の酋長とのホモエロティックな結合の構想に着目し、焼かれるインディアンに自己投影することで、自虐的な苦痛の快楽を経験しようとする語り手の姿には、征服者と被簪奪者の対比を突き崩す試みを見ることができると論じている。*Studies in English Literature*, English Number 55 (日本英文学会、2014年3月)には、KONOKI Takaomi, “Conversion as ‘a human constant’ in Robert Penn Warren’s *Brother to Dragons*” が掲載されている。この論文は、Thomas Jefferson の甥 Lilburne が犯した黒人奴隷殺害事件に基づく、ロバート・ペン・ウォレンの長編物語詩 *Brother to Dragons* を取り上げるものである。論者は、作品中に見られるジェファソン、および、ウォレン本人を思わせる登場人物 R.P.W. の変化、すなわち、楽観主義を捨て、過去の出来事に目を向けて、その意味を探求するようになる様を、作品を丹念に読むことで明らかにしている。

『関東英文学研究』第6号 (日本英文学会関東支部、2014年1月、『英文学研究』支部統合号、Vol. VI に収録)には、アメリカ詩を論じる2編の論文が掲載されている。SADAHIRO Maki, “Anthological Form of Unity: Herman Melville’s *Battle Pieces*” と FURUI Yoshiaki, “Reading the Margins: The Futurity of Susan Howe’s Archival Recovery” である。前者は、メルヴィルの『戦争詩集』が示すアンソロジーとの類似性を指摘したうえで、そこに見られる韻律の多様性、北部・南部を問わぬ複数のベルソナの使用、出来事の年代順の配列が、北部連邦の均質性ではなく、南北戦

## 回顧と展望

争後の和解を示すことを論じるものである。後者は、「言語詩人(L=A=N=G=U=A=G=E poet)」の一人として知られる Susan Howe の作品“Melville’s Marginalia”(1993年出版)を取り上げ、メルヴィルの余白書き込みに注目するこの作品が示す「アーカイブ的回収」の試み——忘れ去られ、沈黙させられた言葉を発掘すること——を、作品に見られる書簡の性格に注目しつつ明らかにしようとするものである。

『T. S. Eliot Review』第23号(日本 T. S. エリオット協会, 2013年11月)には、大会特別講演の記録(大田信良「エリオットの文化論, 「制度」としての「英文学」, クリエイティブ産業」), 大会シンポジウムの記録(「T. S. エリオットと戦間期イギリス」)に加え、論文 Atsuko Yamaguchi, “Where Prayer Has Been Valid: On the Space of ‘Little Gidding’” が掲載されている。また、『Ezra Pound Review』第16号(日本エズラ・パウンド協会, 2013年3月)には、『詩篇』第5篇および第6篇の翻訳(それぞれ山内功一郎訳, 富山英俊訳)などとともに、論文として、朝倉さやか「「歌」から「語り」へ——“Three Cantos”における音楽性とペルソナ」が、掲載されている。英語圏モダニズム詩の勃興期から約100年を経た現在、モダニズム詩人の再読のあり方にも関心が集まることであろう。

そのほかに、次の論考を挙げておく。小田敦子「エマソンの詩と詩論——Emerson’s Poetry and Poetics」(『Philologia』[三重大学英語研究会] No. 45, 2014年3月), 松本明美「エミリオ・ディキンソンの情熱的なペルソナ——「装填された銃」の詩を中心に」(『英米文学』[関西学院大学英米文学会] Vol. LVIII, Ser. No. 82, 2014年3月), Kevin Keane, “Love and Eros in E. E. Cummings’s ‘somewhere i have never travelled, gladly beyond’ and Other Poems”(『言語文化学研究 英米言語文化編』[大阪府立大学人間社会学部言語文化学科] 第9号, 2014年3月), 平野順雄「師と教え子との対話—チャールズ・オルソン著『ミュソロゴス』読解」(『IVY』[名古屋大学英文学会] 第46巻, 2013年11月), 森田孟「死を讃えるドナルド・ホール——具象による抽象, 抽象の具体化」(『成城文藝』第225号, 2013年12月), 同「〈紗幕〉を通しての愛の探求——エドワード・ハーシュの連作詩」(『成城文藝』第226号, 2014年3月), 『Aurora』18号(オーロラの会, 2013年7月)に、マキシーン・クーミン, ジョン・アップダイク, H. D., ウィリアム・スタッフオード, レイモンド・スースターの詩の翻訳が詩人の解説とともに掲載されていることも記しておく。

(名古屋大学教授)